

シリーズ「高脂血症(脂質異常症)」②

高脂血症(脂質異常症)の検査

国立病院機構和歌山病院

研究検査科 坪井 俊裕

高脂血症は、2007年に日本動脈硬化学会が公表した「動脈硬化性疾患予防ガイドライン2007年版」により、「高コレステロール血症」と「高脂血症」を総称して「脂質異常症」という呼び方に置き換えられました。脂質異常症は、血液中に溶け込んでいる脂肪分(主にコレステロール、中性脂肪、リン脂質、遊離脂肪酸の4種類の脂質)が多すぎて、血液がドロドロになり、血液循環が悪くなっている状態を示しています。恐ろしい事に、血液中の脂肪分が異常に増えていても、自覚症状が無い為、放置されてしまいがちであり、増えた脂質分はほとんど血管の内側にたまっていき血管が硬くなり、動脈硬化を引き起こし、やがて心筋梗塞や脳梗塞を併発する危険性があります。現在、脂質異常症のスクリーニングの為に、3つのタイプがあり、LDLコレステロールが多いタイプ

の、高LDLコレステロール血症(LDL-C)Ⅳ140mg/dL、HDLコレステロールが低いタイプの、低HDLコレステロール血症(HDL-C)＜40mg/dL、中性脂肪が多いタイプの高トリグリセリド血症(TG)Ⅳ150mg/dLに大別され、どのタイプの脂質異常かによっても治療が異なります。

管壁にくっついて傷ついたり、壁を厚くして弾力性を失い硬く、もろくしてしまいます。逆にHDLコレステロールは細胞内や血管内にある不要なコレステロールを回収し肝臓に戻す働きがあり、この値が低いと血管内にコレステロールがたまりやすく動脈硬化の要因となります。又、中性脂肪は、食事の影響を受けやすい項目であり、それ自体は動脈硬化の原因にはなりません。中性脂肪が多い事によってHDLコレステロールが減ってLDLコレステロールが増えやすくなり、間接的に動脈硬化の原因となります。今回の脂質異常症のように、症状のない病気を早期に発見するには無症状のうちから定期的に健康診断で調べるしか方法はありません。脂質異常症を判断する検査項目の「LDLコレステロール値」「HDLコレステロール値」「中性脂肪値」は、健康診断では必ず行なう血液検査項目であります。少なくとも年に1回は、検査前日の高脂肪食や高カロリー食・飲酒を慎み、早朝空腹時の血液検査から血清脂質の測定を行ない、自分の体の状態を把握する必要があります。

があると考えます。